随想二題

華麗な、そして実りあるウィーンの十日間

にしむら珈琲店
川瀬　喜代子

ウィーンコーヒーハウスオーナーズ協会の招待で、我々全日本グルメコーヒー協会員は二月八日ウィーンに出発しました。到着翌日、十一月から始まったあの映画〝会議は踊る〟の舞台になったホーフブルグ宮殿の大舞踏会に招待されました。燦びやかな宮殿には着飾った紳士淑女の群が約五千人。夜十一時一際高く響くファンファーレを合図に、今年社交界にデビューする令嬢が白いドレスに金の冠をつけタキシードの男性にエスコートされその数二百名、しずしずと宮殿の階段を下り優雅な挨拶の後、流れるウィンナワルツに乗って舞う姿はまるで映画の一シーンの中にいるようでした。

夢のような興奮もこの夜限り、我々は翌日より、朝十時より五時迄しっかり講義を受け後時間のある限り市内のコーヒーハウスを見学して歩きました。はっきり言ってコーヒーをはじめ食文化は日本の方が進んでいますが、ウィーンのコーヒーハウス経営者は、日本グルメコーヒー協会の目指している単に喉の乾きを癒すだけのコーヒーとしてでなく、いかに寛ぎと安らぎを与えるかということを一つの哲学として持っています。ウィーンでは新聞が家庭に配達されません。市民の一日はカフェで新聞を読みに行く事から始まります。殊に土、日の商店の休みの日はカフェでチェスをしたりビリヤードの置かれている所もあり時にはコンサートを開いたりコーヒーハウス経営者が市民文化に貢献され、その事に人間として生甲斐を持っておられます。それだけにコーヒーハウスオーナーズの社会的地位は高く、羨しい限りですが、日本の現状と余りにも桁違いの投下資本。六〇席の店が三千万円で開店出来ます。それにもう一つのネック、チップ制による営業経費の大差、国情の違いをせつなく思いました。ウィーンを離れる日は感謝祭の前日で各店の売子も街行く人々も思い思いの仮装で、日本では見られぬ光景に送られ、総てに恵まれたウィーン滞在でした。

ホーフブルグ宮殿の大舞踏会

会長のラングホーマン氏が最後に面白い事をいわれました。

「残念ながらウィーンにはウィンナコーヒーはありません。それにウィンナーソーセージも。」

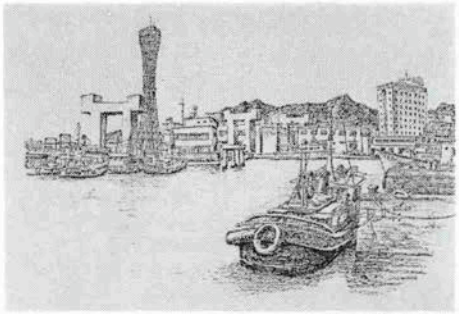
随想 二題

魅せられ、描き続ける神戸の街並

会社員
浅井 審一

写生の好きだった私が京都からふと足を運んだ神戸のメリケン波止場、突提に腰をおろし、ポートタワーをのぞんで、足元の岸壁にひたひたと波の音を聞きながら港の風景を時間を忘れて描いた一日、そしてその帰り道の何やらデートのあとのような淋しかった思い出、私のこの街とのおつきあいは多分その頃からだったと記憶しています。特に望んだわけでもないのに、神戸に転勤になり、通勤は無理とのことで住吉川のほとりのマンションに社宅として住むことになったのは数年前でした。職場がかわり忙がしかった仕事に慣れ、落ちついたときこの街々に私はとりこになったらしく、定年をまえにして居を移り住みつくことにしました。京都の室町通の古風なベンガラ格子の町に育った私が、神戸のそれも人工島、ポートアイランドに移り住んだとはと、自分でもその変化におどろいています。年齢のせいもあってか、早起きになり、魚釣りやジョギングの早朝の仲間に入って、神戸の街角、ポートアイランドのあちこち、を夢中になって描き出しました。新しいデザインを競って建てられるファッションビル、活動的な港の風景のあれこれと共に、神戸には数十年の歴史を刻んだすばらしい貫録のあるビルも沢山ありました。

先日もそれとは知らずに描いた旧神戸商工会議所ビルが、惜しむ人たちの音楽のお葬式などに送られて取りこわされてしまいました。港近くにすばらしい形をして建つ神戸税関も楽しく写生しました。



絵／浅井 審一

旧居留地にある元の十五番館ノザワ本社などもまだまだ現役で働いているとか、次に描きたい一つです。北野町の異人館も一、二度行ったことはありますが、早いうちに描いておかないと、と思いつつ、多少のあせりも含めてわくわくしています。この街のとりこになって移り住んで数年、第二の職場、仕事をこの地に得て、余暇をまって次第に姿を消していく古いもの、そして新しく生まれてゆく街々も…と私の神戸とのおつきあいはまだまだ限りなく続きそう、というより今はじまったばかり、次の休日がお天気でそして自分が健康で描ける日が楽しみの毎日です。

地域文化論

〈その103〉

姫路市立美術館から次への興味が待たれる

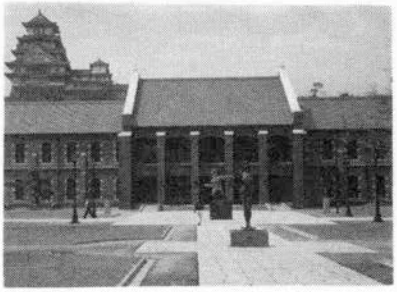
嶋田　勝次
〈神戸大学建築学科教授〉

姫路が近くなった。そして明るくなった。古い城下町で重工業経済主体の都市から全くイメージの異なる街に変りつつある。この姫路市長の戸谷松司さんは、市長になられて二期目の地元出身者であり、その前には兵庫県副知事として活動されて来た。私自身いろいろ可愛がっていただいたが、先年の明治建築の兵庫県南庁舎の保存運動に大変苦労されていた様子を、その後お会いしました時に、いつもその話しを出してこられて、それだけでも感謝に堪えない。

それから姫路市総合基本計画審議会の一委員として将来のビジョンづくりにかかわったが、更に姫路市の都市景観形成審議会の会長として、有識者の方々と景観マスタープランづくりや景観条例の組み立てに関係しながら、大きくいえば時代が変る先導的役割を感じて来る。

ところでこの姫路市立美術館が新しく八十三年はじめに完成して以来、いろいろ面白い企画を重ねられて来た。今回も副館長の伊藤誠氏にさそわれ、桜には一寸早い春休みの一日を楽しんだ。この展覧会は「昭和前期洋画の歩み展」と題し、花開く時をあまり知らなかった私にとっては、好きな松本竣介や脇田和などまでのんびり見ることが出来たのは幸いだった。

この建築は、新しい十階建の市庁舎が国鉄南部につくられる前の市役所であり、もと軍隊の兵器庫でもあり、そのうち北側と西側の二棟の赤煉瓦の建物をみごとに再生保全されて、新しい文化の殿堂となったものなのである。ゆったりとした前庭をもち、背景に国宝姫路城を配している赤煉瓦の存在感は、江戸時代の封建的シンボルというよりも、明治時代と組み合わされている姿が何ともよい。その実体のコンビが今日新しい風景を生み出し来るものだと思うし、ほんものをきちんと残すことは、いいものをつくることにつながっていて、連鎖反応を起こして来ることがわかる。この建築は、八二年一二月に完成したが、その一寸前の八二年九月にはすぐ北側に兵庫県立歴史博物館が、有名な建築家丹下健三先生の手によって新築され、清新な建築として誕生して、古いものとのよいアンチテーゼがのぞいている。


姫路市立美術館正面

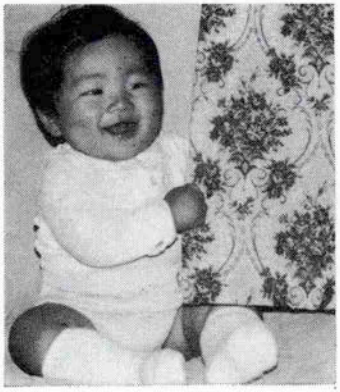
更にその北側にある空地を利用して城郭センターの建設が予定されている。この建築は著名建築事務所の指名コンペだったが、姫路城の古いデザインを継承することをアッピールしようとしたものと隣りの丹下先生のデザインより時代を新しく進めることを考えたいという意識を感じたりしたものなど、あの場所における動きは興味深い。

古いものと新しいもの、歴史とデザイン、現代のさまざまな動きの中で今日的なものと明日的なものをどうとらえて行くか楽しみになって来る。

それにしても戸谷市長の文化に寄せる並々ならぬ意欲に更に敬服したい。

姫路は変った、変りつつある、その真只中に立って、この市立美術館の建築自身と共に、そこで行なわれる意欲的美術展も見られるし、更に来年行なわれる「シロトピア」と名付けられている市制百周年を祝う博覧会も、一層期待しながら待たれて来るのである。

こんにちは赤ちゃん

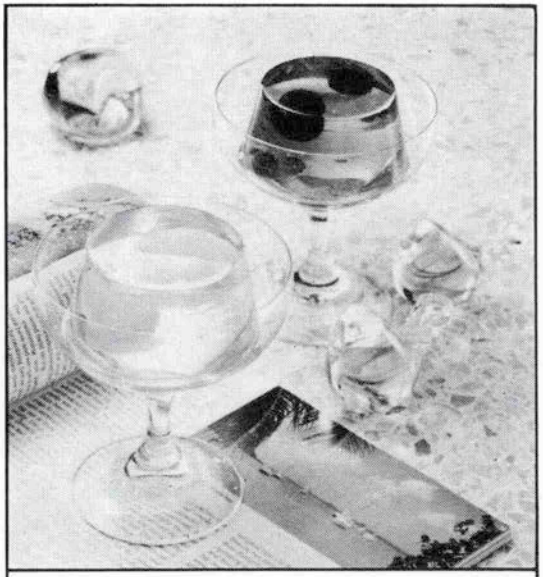


元山年弘くん／芦屋市翠ヶ丘町
「カメラに向かって―恥かしいっ！」

完全看護★冷暖房完備★病院前公共駐車場有

芦屋 柿沼産婦人科

芦屋市大枡町１番18号
芦屋保健所東隣
☎ 芦屋（0797）31－1234 代表



ときめきの彩り

デザート

グレープ・パイナップル・オレンジ・そして
キルシュの新鮮なフルーツが、きらきら
ゼリーに閉じこめられたファンシーな
デザート。お口に含めばフルーツの甘い
香りが広がります。
人気のプリンとの詰合せです。

Juchheim's

ユーハイム

■夢エッセイ〈Ⅵ〉

言葉の夢

野口武彦〈神戸大学文学部教授〉カット・田中一好

思うに、夢というものは言葉で見るものらしい。読者諸氏も御記憶があるだろうが、夢を見ているさいちゅう、そのギャグのあまりのおかしさに、げらげら笑って眼がさめてしまうということがよくある。たとえば、筆者などは国立大学に奉職している身であるが、「親方日の丸」という言葉がある。ほんとうに、日の丸の旗をフンドシにしめた夢を見たものだ。三島由紀夫の自決の直後だったかもしらない。せめてハチマキにすればよかったのに。しょせんは口舌の徒、夢のなかでさえ英雄になれないのである。

言葉といえば、毎年、学生諸君の卒業論文を読んでいると、だんだん日本語に自信がなくなってくる。誤字脱字などは、あたりまえのことである。最近のヤングは、平然と日本語をネツゾウする。この原稿にも誤字があるかも。しかし責任は主として、学生諸君の側にあるノデアル。

名前はいわない。ある女子大学で、哲学の試験にデカルトを出したそうだ。有名な言葉がある。コギト・エルゴ・スム。「われ思う、故にわれあり」。えらそうに横文字で書くと cogito ergo sum である。ところが、問題の女子学生の答案がよかった。コギト・オルガスム。いちいち注釈するようなやぼは致しません。あまり上品な冗談ではない。が、ほんとうの話である。

学生にかぎらない。言葉というものを気にしはじめると、これはまったくきりがなくなるのだ。筆者が住んでいるマンションのすぐ前に、幼稚園がある。そこに看板がかかっていて、その文言にいわく——

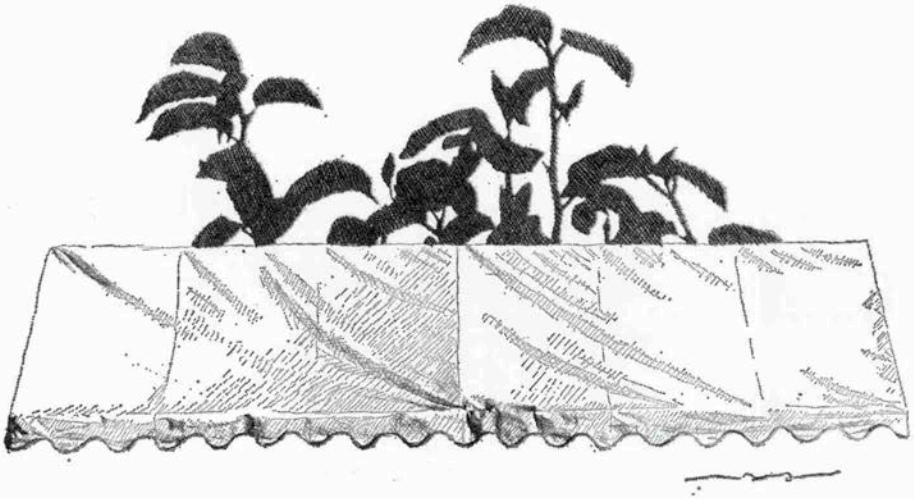
停まるな。園児が歩いている。

通常の日本語だったら、これは自動車のブレーキを踏んではならない、という意味になる。さすがはわがワイフ、車を突っこんだりはしない。週に何日か、ワイフの車で登校する。途中で見る警察の（？）、あるいは町内自治会の看板で、また考えてしまうのである。

痴漢が出る！　美女のあなたは気をつけて。

ブスだったら気をつけなくてもいいのかよ。どうも言葉に気配りがないようだ。もしかしたら女性たちは、そういうことをされた方が自信を持つよすがになるとでもいいたいのであろうか。筆者

はよく朝まで飲む。ふらふらして早朝の電車で、A駅――いや、いっそ芦屋駅といってしまおう――に降りる。そんな時間からあいている食堂がある。またぞろ看板の話で恐縮だが、こんなふうに書いてあるのである。



朝食してます。　店主

当方としては、考えちゃうんだよね。東京生まれだから仕方がないのかもしれない。しかし、これは関東弁では、タダイマ食事中ニツキ御入場エンリョシテクダサイという意味になるのである。こんな具合に、日々文字を見て歩いてゆくと、面白いですぞ。A駅のすぐ近くに、美術品をあつかう店があった――と、あえて言っておこう。「意詫版売」。どうして店がお詫びしなけりゃならないの。あんまり客の方も信用できないのではないか。

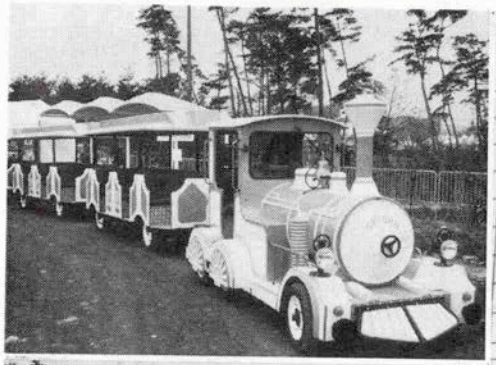
夢というものは、しょせん言葉で、あるいはむしろ言語で見るものではないのか。夢を見ているうちに、笑ってしまって眼がさめるということはよくある。だが、その反面、自分のあまりの残酷さに気がついて、泣きながら眼をさますということもある。

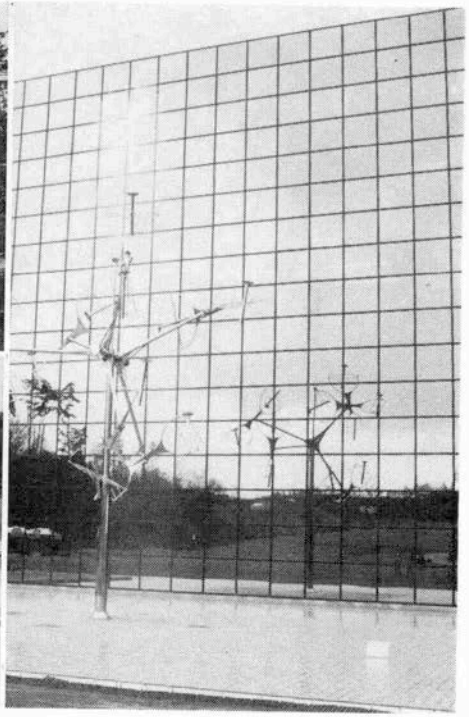
〈夢。わたしは海岸にいる。いままで一度も見たことのなかった奇妙な生物が目前にいて、わたしに何かを語りかけている。わたしは何か憎悪にかられて、手もとの石でそれをさんざん打ちのめす。相手はそれでも死なない。なお触手をひろげて、追ってこようとする。石でたたきつぶす。いわゆる完膚なきまでに粉砕して、自分が一人前になったように感じる。――翌朝、めざめてから思い出した。あれはヒトデという生物だった。

日頃、暴力がだいきらいな筆者が、夢の中ではなぜあれほど残酷になれるのかわからない。最後に多少シャレじみるけれども、筆者はどうやら、あまりヒトデにかかりたくない性質のようである。

□北摂・丹波の祭典――ひょうごホロンピア'88

新しい田園文化都市をめざして「21世紀公園都市博覧会」開催中





（左・上）ホロンピアレディの皆さん（同・下）話題を呼ぶ"30・ウルトラマジカ"が見られる。

新しい田園文化都市への出発――と題した「ホロンピア'88」が、北摂・丹波の緑深い広大なエリアのなかで展開された。

三田市弥生が丘の「21世紀公園都市博覧会」では、古代から未来へと綴る都市物語が映像や模型によってロマンチックに語られ、フロアごとに新しい発見ができるのが魅力的である。

バビロンの空中庭園・ピラミッドとスフィンクス・ポンペイの噴火、そして世界の高層建造物の背くらべも面白い。

屋外では、「21世紀の住宅展」が、さまざまな表情の住居を並べ、「世界の童話村」は永田萠さんの夢がそのまま子供達を童話の国へ導き、「うさ

緑あふれる北摂・丹波地域で4月17日から11月6日までの204日間にわたってホロンピア'88が開かれている。4月17日〜8月31日の間、「21世紀公園 都市 博覧会」が三田国際公園都市内で、9月23日〜11月6日の間、「ひょうご食と緑の博覧会」が四季の森公園（多紀郡丹南町）で開催される。

<円形劇場でのイベント>

- 5月14日(土)　立花理佐ショー
- 7月24日(日)　アグネス・チャンショー
- 8月12日(金)　神野美加ショー
- 8月24日(水)　酒井法子ショー

なお円形劇場では、これらの催しの他に、ホロンピアダンシングチームショー（5月6日〜12日）、兵庫県下各市町を案内する兵庫ふるさと紹介（5月29日他）、またホロンピア館においては自動車ショー（4月17日〜8月31日）など多彩なイベントが繰り広げられる。

<入場料>

- 大人2,000円／シルバー（65歳以上）1,500円／高校生1,200円／小・中学生1,000円／幼児400円。

<会場への交通>

鉄道利用の場合　神戸方面から―神戸電鉄で約55分。北神急行・神戸電鉄で約45分。

自動車利用の場合　神戸方面から―新神戸トンネル・六甲北有料道路で40分。

（右）ホロンピア館（中・上）世界の童話村のミニ列車（同・下）円形劇場

ぎの国」「プレイランド」新しい設備など、家族連れで楽しむ時間を演出してくれそうである。

8月31日までの会期中は、場内の円型劇場や芝生広場・館内ホールなどで、毎日多彩な催しが繰りひろげられる予定である。

「ホロンピア'88」は、この博覧会のあと、9月23日から11月6日まで、丹南町の四季の森公園で「ひょうご'88――食と緑の博覧会」が催される。住まいに次ぐ食文化の祭典である。今、その開幕のため営々と準備が進められている。

経済ポケット ジャーナル

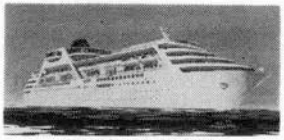
★京阪神WFF—開催決定

通産省が昭和五十八年にわが国のファッション産業の国際的な飛躍、発展をめざして提唱したワールド・ファッション・フェア（WFF）の関西での開催を推進してきたWFF推進協議会（佐治敬三会長、塚本幸一副会長、石野信一副会長）は三月二十四日、第四回総会を開き、来年十一月、第一回WFFを開催することを決定した。

名称は「パルクレードーワールド・ファッション・フェア'89—美感遊創の祭典」で、通産省、日本商工会議所の後援により、京阪神三都市の連携をもとに行なわれる。

多彩な行事が予定されているが、このうち神戸では神戸コレクション、神戸ファッションタウン街びらきイベント、グルメフェア等が予定されている。

★日本初の大型クルーズ客船「ふじ丸」起工



「ふじ丸」完成予想図

商船三井グループが発注した日本最大の大型クルーズ客船「ふじ丸」の起工式が四月十四日三菱重工業株式会社神戸造船所（松本秀所長）で行なわれた。

全長百六十七メートル、幅二十四メートル、総トン数二万三千五百トン。旅客数は六百名で、乗組員数だけでも百十名を擁するというからその大きさも桁はずれ。完成すれば、日本郵船の「秩父丸」を抜いて、もちろん日本最大の客船となる。

来年四月に完工の予定で完成すれば日本一周、東南アジア方面への航路につく予定。いま再び船の時代に。

★メガネの三城・三宮店オープン！

店長の山中さん

永い間三宮に店舗を持たなかったメガネの三城が三月二十六日そごう駐車場の南側、サンビル一階にオープンした。

特に新店舗では「海外店コーナー」が設けてあってパリ、シンガポール、ホンコン、ハワイの各店から輸入された商品を、円高メリットも手伝って、現地価格に近い価格で購入できる。

また営業時間も、朝八時半の開店から夜七時半までと余裕があって、ビジネスマンの〝お忙士〟にはうれしい限り。

くつろげる店内、スタッフの親切な応待も魅力です

☎二四一—一〇〇一

★神戸北町オーストラリアパビリオン「グッダイハウス」完成！

グッダイハウス

大規模な街づくりの進む北神地区の中で、このところ特に注目を集めていた神戸北町に、かねてから建設がすすめられていたオーストラリアパビリオン「G'DAYHOUSE」が完成した。

今年建国二百年を迎えるオーストラリアのことを、もっと詳しく知ってもらおうとするもので、海を越えてやって来たコンパニオンのお二人の日本語もさすが家族そろって楽しめる。

■AM10時～PM5時、水曜休。

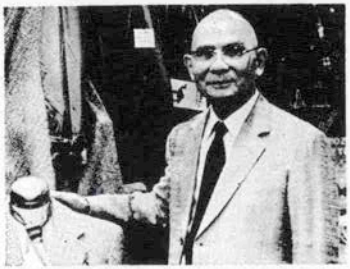
★KOBEオフィスレディ★

湯上智香子（ゆがみ）さん（26）〈三菱地所ホーム㈱神戸営業所勤務〉

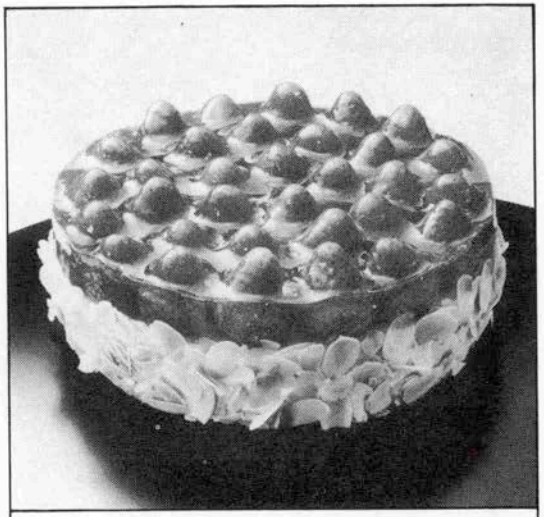
インテリアに興味があり、コーディネイトスクールに通っている湯上さんは、去年10月からこちらに勤務。「休日は何を？」という質問には「学校の宿題がたくさんあって…」とのこと。それでも趣味は多彩で、ドライヴ、スキー、テニス、インテリア店めぐり、英会話など。設計事務の仕事は、現場の雰囲気を感じることができて、やりがいがあるとのお話。

撮影の時、笑いを堪えている表情が良かった。宝塚市在住。水瓶座のA型。

ハイセンスな紳士服で
最高のおしゃれを



三恵洋服店
神戸・元町4丁目 ☎(078)341—7290



Erdbeer Torte
エルトベア トルテ

春のおとずれを知らせてくれるフレッシュなケーキです。2層スポンジに、ストロベリークリームをサンド。まわりには、香ばしいスライス アーモンドでアクセント。上には、たくさんのもぎたていちごを並べて、クランベリー味のゼリーで囲んであります。春らしい、さわやかな風味です。

ユーハイム

JR神戸駅

伊勢田 史郎 詩人

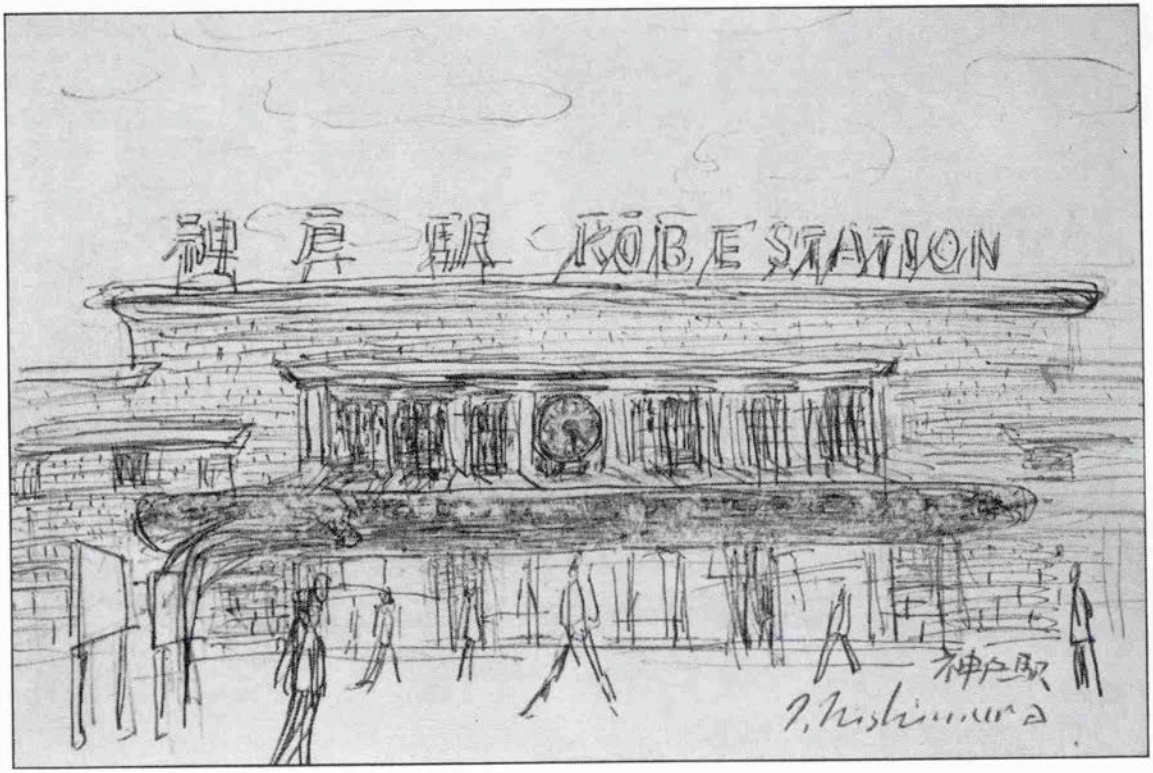
子供のころ兵庫運河の北側のあたりに住んでいた。母の叔母が平野に住んでいて、若い母は時に私の手をひいてこの家を訪れるのであった。大叔母のつれあいは日本郵船の外航船の船長をしていた。紫檀でつくった象の置物だとか、ミクロネシアのチャモロ族の仮面などが客間には飾られていて、幼い私にはその空間は異質で珍奇な別世界であった。

平野は市電の終点で、ある夜おそく母と私はここから三宮行の電車に乗り楠公前で降り、松原線まわりに乗り換えた。と思ったのに、終電車まぎわだったせいか、母はあわてて兵庫駅行に乗ってしまっていた。それから、どのようにして帰ったのか明らかでないが、その時、白い母の頬がまっかに染まったのを鮮やかに覚えている。それと、神戸駅前の市電の線路が夜目に複雑に交叉し、光っていたのを。

神戸駅は国鉄（JRというべきなのか）山陽本線の始発駅であり、東海道本線の終着駅である。太平洋戦争の終わる年の春、私はこの駅から〝銀河〟という名の夜汽車で東京に旅立った。興亜専門学校という拓殖系の学校に入るためにである。

世界は一つの迷宮である、というようなことをJ・L・ボルヘスは書いている。私はとまどい羞らいのいろを匿せなかった母を愛していた。そして、その器用な生き方の出来ない彼女を残して、私もまた闇雲に出発した。人生という一つの迷宮に向けて。

神戸駅とその駅前のあたり。ここが、母にとっては迷路の岐点であり、私にとっての始発点である。



絵／西村　功

神戸駅のある風景

阪急三宮駅

釜谷かおる 作家

「はい、切符」

男はいつも、回数券を女のぶんまで渡してやった。彼のたどる二区間の家路が、自分と同じでないのが女にはちょっぴり悲しい。

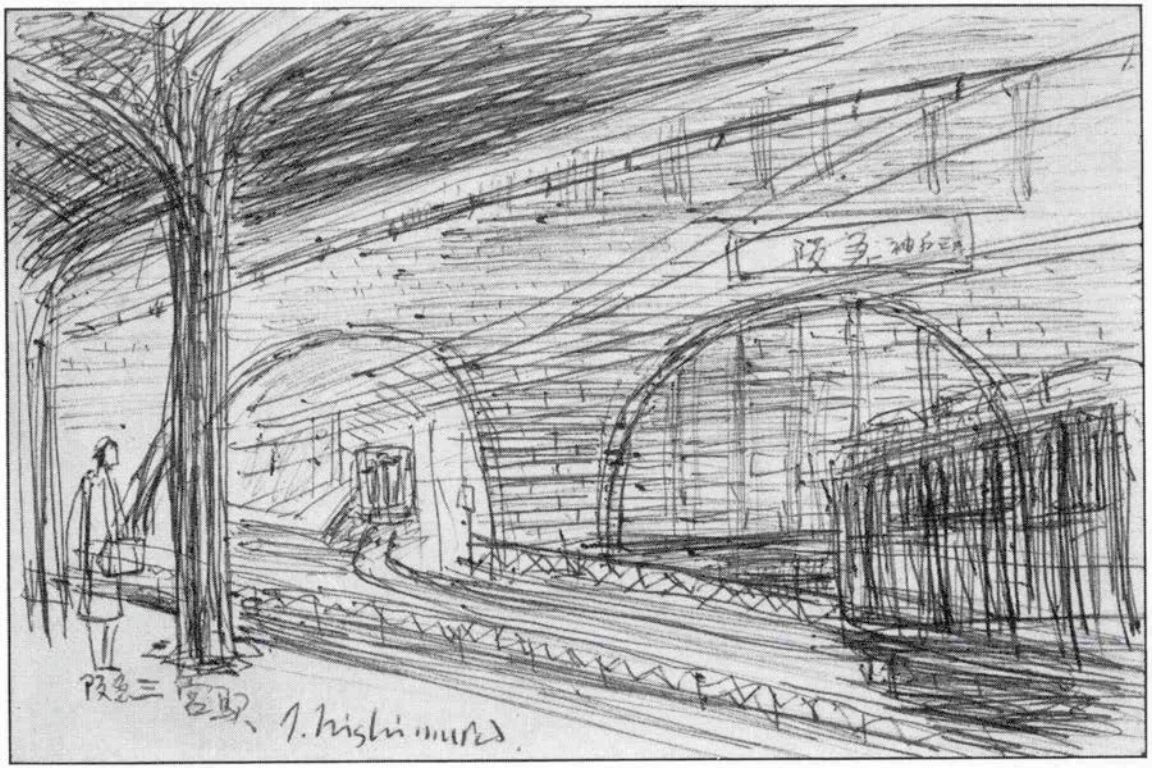
とうとう今夜も「送るよ」とは言ってくれなかった。彼と彼女は同じホームへ上っていき、そして西と東へ別れていく。いつも彼の乗る上りが先に来て、ガラスごしにさよならを言って…。もうこんなことが二年も続いている。女はそろそろ疲れ始めていた。

あずま男に神戸っ娘。あと一年の研修期間をすませれば、また東京へ帰っていってしまう彼なのだ。私は駅。女はつぶやく。彼にとっては通過していくだけのひと駅にすぎないのを知りながら、ここでレールを切り落とし彼の最終駅になりたいなどと考えたりして。

——そんな、小さなラブストーリーが一つ、浮んできそうな阪急三宮駅、午後十時。

生田のまちはまだいきいきと目覚め、人々が往来し、ネオンが踊りをやめない。そのまちを見下すような位置で、ほんの少し眠くなった駅は人々を吸い寄せ、血液のように東へ西へ、送り去る。ホームを覆う、古代の恐竜の肋骨みたいなドームを、風が吹きぬけた。

時がゆき、彼女の恋の記憶が人生の一駅にすぎなくなったとしても、また別な「彼と彼女」が、このホームのどこかで似たような物語を演じているだろう。あずき色の鉄の箱は、まるで疲れを知らぬ時計の振子のように、今日も彼と彼女の日常を乗せ、滑り込んでくる。



絵／西村　功

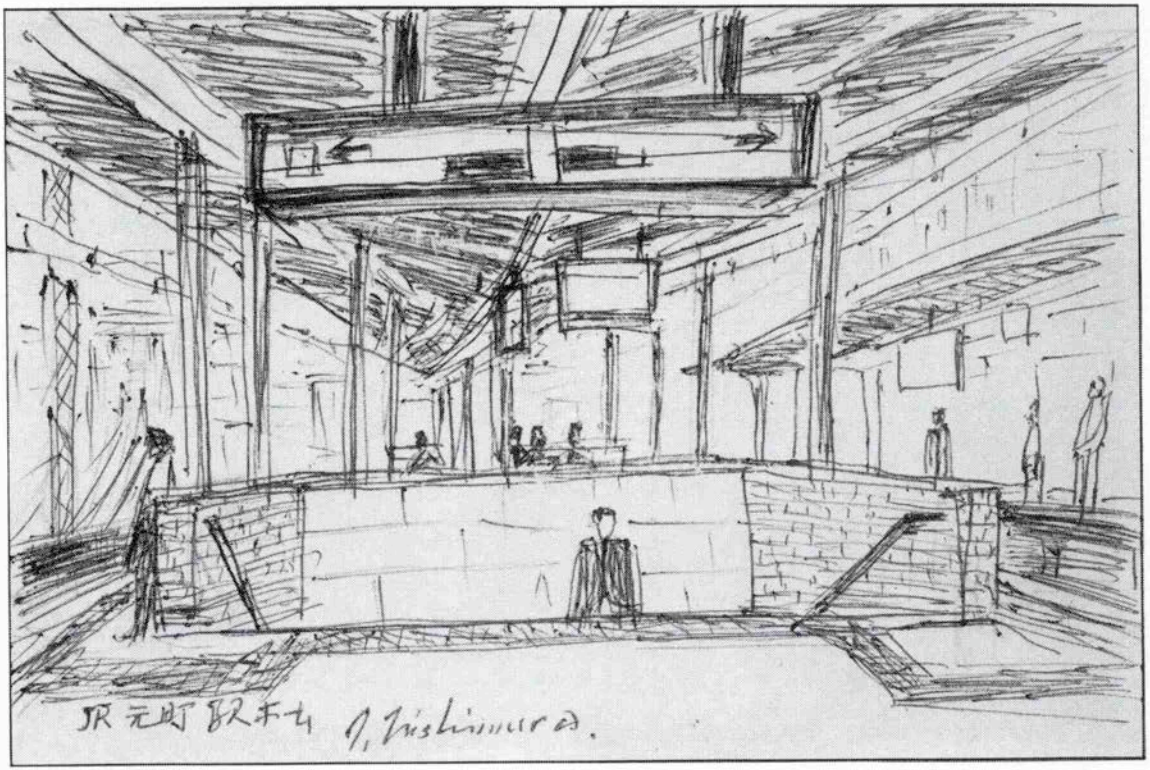
駅のある風景

JR 元町駅

島田誠　海文堂社長

「驛」とは「行旅の宿止又は其の求めに応じて車馬をつぎたてるために設置した途中の亭舎」である。（諸橋轍次・大漢和辞典）驛が駅になっても、そこは人が集まり、また散ってゆく、人々のドラマ、人生の哀歓を覗かせるステージであることに変りはない。だから（バスや市電は停車場であって駅とはいわない）古今東西、駅を舞台にした文芸作品は数えあげれば日が暮れる。こと数年間、阪神元町駅ビル場外馬券売場の反対運動に関ってきて「元町の駅」あるいは「駅の役割」については真剣に考えてきたつもりだ。当時、日本交通文化協会が“Public Space”という立派な雑誌を出していて、これが何んと「駅」について考える専門誌なのだ。これを発見した時は驚嘆し、愛読した。こんな立派な雑誌は寿命が短いぞ、と思っていると、残念ながら予感通りになった。ともあれ、この雑誌のタイトル、駅の機能のすべてを物語っている。

一九三二年三ノ宮、元町、神戸駅（JR）は高架化工事に伴い改良され、当時一等駅の諸施設を手際良く高架下に蔵めたのは欧米にも余り前例を見ないといわれた。今、元町駅に立って、その面影はない。プラットフォームから見えるサラ金の看板、三五枚。駅舎は立派になったが中身はWINSの阪神。Pablicは何処にあるのか。企業努力は当然。でもJR、阪神共にPablicの心があれば、今の姿は絶対に無い筈だ。「志」があれば現実はあとからついてくる。今、その「志」が欲しい元町駅界隈である。



絵／西村　功